鎌倉震災記

久米正雄自筆原稿

西垣文庫
文庫10
8833

原文第二稿ハ十八行組

鎌倉震災記

久米正雄

（千葉鎌倉長谷の隠者のくめに借りて家屋で、）

私は其の時、二度或る人への手紙を書き終って稲瀬川の右岸なる、前夜の雨のあと、其の人と私とは、草深い堤の上で、足下に鎌倉の音を聞きながら、暗い月の出を待ってゐた。そして其の黄色い葉を帯びて半月が、中空に冴える頃まで、行末の事を語り、其の後の嵐気を含んだ物凄い雲が、合つて、月の色と共に、霧の下りて来る中の

音と云ひ、遠く霧を帯びて鎌倉山の松の形と云ひ、近くはありなから遠く夢のやうに霞いてゐる潮音と云ひ、月光を映して連立つて河面と云ひ、殊に殊に深い印銘を私に与へて。

私は手紙に其事を書いて。そして私達は自然にかくまで祝福されてゐると書いて。

恰も自然が邦に喜びのために伴奏して呉れてゐると書いて。——私に取つては、それは苦しい嘗ぢつて。自分の青春の血を、熱く燃ひ尽して、しかも又苦悩に満ちた少い失恋の殯葬を営めねばならぬ。

十ノ井 松屋製

かと思はれて、望みなき片恋ぢつて。少くとも自分ではそう思ひなから、狂ほしい程の熱情を頼りに、憂闘を重ね、苦悩を続けて、思ひ断ち得ぬ恋慕ぢつて。時には、此の思ひは、いっそ生命を賭けると迄思つて。

彼女の境遇を考へると、絶ゆれど、望とし思はれなかつて。それから、ゆくりなくも其前夜、実にあの地震の三夜前に、彼女から誓の言葉を受いて。だから私達は、少くとも私は、地震の前後は、人生に於ける幸

腸の絶頂に在つて。

もう私は他の誰をも羨ま
ない。

偶死んでも悔まない。私はもう年老
的過ぎる位、私は誰をも恨まない。

の人生の最高潮時に陶然
として在つて。

に書いて。そして其の死んで
も惜しくないと書いて、ものゝ半時間も経
てぬ中に、てんな大きな自然の欣腸を
愛し、死の淵に飛んでもない愛しようと
は！全く私はかうして永らへて、神に感謝
してはゐるが、あの時死んでもよかつたのだ。
寧ろ天から殺されるべきものであつたかも知れ
ないのだ。でも、かうして生かして呉れた事

に、私は限りの無い天の恵を謝め、限りな
い感謝の中に、淋しくとも不安であらうとも
健気に生きて、天の高志の命ずるところのものに、
餘生を献ずようと思ふ。恐らくは彼女と私と
は、此の震災の為に更に障害を増して、或ひ
は遠く離れなければならぬかも知れない。
を畫してやむを得ない。が、それとても人事
めるより外はない。矢張り天命と諦
の人生の幸福の絶頂が、実は此の地震と微妙
に交錯して、其処に偶然の故意か
全く小説

それは無
私の世
いおおとこ天
から叱まる
ものと
ものとは思
ひたくない。
くば私の一
生の上で、極
めて時宜を
得た一種
の「落」を入れ
られたものと
して考へ
る。……

的とも云つていい位、妙な天意の印銘を感じ
ずにはおられない、意味深い。

それにつけても、此の災厄の渦中に在つて、
一かも其災厄から安全に免れて点に於て、鎌
倉中は(を探しても)あるまい。

其日、忘れようとしても忘れる
事の出来ない九月一日、二百十日前日の午前
[illegible]は、後来から濃荒れ気味の雲が立つて、時
々驟雨がはらはらッと来るかと思ふと、流れ切
れがしくやうに、気味の悪い日がはくッと

知らずも好運ぞつくものは、[illegible]きつと

十ノ廿 松屋製

差しかゝりて、地震でなくとも何か[illegible]の荒れ
を暗示する。厭な天候ぞつた。今日が恐らく
今年中の、最後の海水浴場の土曜日ぞとは知
つてゐながら、此も海へ行く気などはしない
天気ぞつた。私は朝起きるとから、其の不順な
天気模様を眺めて、いつも夏場の鎌倉が、必
ず一度は受けるべきシケが、今年は八月の終
つてもまだ来ないを思つて、もう来てもい
い時だなと考へてゐた。そして此の宜しく停
車場前の平野屋へ、[illegible]若かたら仕事に来てゐ

芥川龍之介が、何かの拍子に感歎で、「今年はきっと何か大きな天変地異（ほんとの）がある ぜ。」と言ってゐるうちに、僕自身何だかさうそわそわやうな気がして、「と、築地も繰り返しく陽言してゐるが、其時私ら

（まで）

思ってほんとにさうそわそわ気はするね。」と、餘り世の中が百年ってゐるから。」なぞと、何だか古ってゐるのだつて、幸に芥川の陽言も、小さな三ケ位で海へさうだなぞと、取り止めもなく考へゐるのだつて。――芥川の陽言は、

（何だかすつかり話題に）

どうにか根據があつてのが、私は知らない。恐らくは山本権兵衛で、出鱈目をとつてゐるのはなからうが、かくまで文句なしに当つてゐるのを、他の如何なる陽言者に放ても見てゐるのはない。

姉

「私は海へも行かず、さりとて仕事をする稼業でもいく気でもなかつたので、其頃今へない時は、殆んど日課のやうにしてゐる手紙を、書きあぐめてのだつて。そして彼女へ

（また）（の）（休日）（稼）

の手紙を書き終つて、今度は其頃の、彼女の欺瞞者なる男も羨しき人に、恋の仲に嫉妬を感じて、情を以て陽解を与へ

（代）（の）（大形の）（同）

手紙を書きかけてゐる。感謝の歓見と、書面実の、――それは直ぐ其前に、毎度の、店へ行つて、買つて来てものだつて。（貝細工類雑貨）恐らくは

（で）

それも鶴子の、最後の持物の一つであろう。

一番三枚目に移って、「そーして、」と三字書いて、時計をつかって。そーして、とーんと何かが隣に響いて、遠い地響かどろくと屋を出くわした。

急にがたがたと家中が座布団に乗せてゐる私の身体は、地の底から揺り上げられるやうに覚へて、動くと、同時に、家中はぐらぐらみしみしと鳴り出って、隣室にある大きな地震だな、と、周囲を見回して、揺れ止むのを待つやうないおでゐる途端、更に地響きとも家鳴り

大きな陰気な

オノサ 松屋製

ざか地震は後で考へると、方向に揺れるひはないか、海の方へと思ってのは百姓ひでっそれは寧ろ動ぐっのだ。

ともつかぬ響と共に、激しい上下動がどーと私たちの雑居を衝き上げた。

倉庫は、餘程、かつて見ぬ程の勢で、

そして隣室との境に仕立てた唐紙が、ケラ飛ばやうに私の室の方へ倒れて来た。咄嗟に私は考を廻した。

嗅のやうだが、私は考へた。是は、此の唐さん大事に隣して、紙の倒れる方向へ、即ち海の方へ向って、揺れてゐるのだな、家も潰れゝば、海の方向へ向いて倒れるのだな、と思ひながら、俺は直ぐに、前

の小さい庭でなく、母屋と私の新屋とが取囲んでゐる、大きな中庭の方へ、飛び出さなければならぬ。と。――そして、去年か一昨年、地震周期説が行はれて、人心不安を覚える際、震災時に関する注意として、新聞に掲げられる注意書に、――ぐらぐらとは嘘でなく私は思へてゐる。――地震の際は絵り憶て、一も二もなく飛び出すこと、部屋は危険に陥るから、壁や戸障子が倒れる為めで逃げ出せとそゝのかすなら、書いてあるのを見ぬ出して、一秒の時間もな

十ノ廿 松屋製

く身を逃すと、家の三尺程前にある生垣の間を、躍るやうに飛びめけて、前の廣場へ出て行つた。出る時、踏みしめ撞倒る私の足腰は、実際、出られないのではないかと思ふ程、後戻り踏ん張りするやうな焦慮を覚へた。

戸外へ飛び出したのは、多分踏躍りに係らず、私が一番早かつた。掴み初めてから、一分と経つても、二分とは経たなかつたらしい。次いで、玄関から、吉田女史が私の後を

ペンを棄て、

を追つて出て来た。と、それに次いで、母屋の後ろの部屋の障子から、鶴吉の若主人が、隣月の妻を撫へて、突のめりさうな動作で出て来た。主人は平常から少し苦味走つて細のある顔を、蒼ざめさせて、やつもすると後ろへ倒れさうに、ぐらぐらとなる妻の身体を、横抱きに運んだ。細君は青い引釣つたやうな眼をして、撫へられながらの大きなお腹をみる所まで、やつと辿りついた。つづいて裏の家にゐる若い奥さんと子供とが、同じく飛び出して来た。

其間も、揺れは止まなかつた。止まなかつたどころでなく、更にもう一度大きな上下動が、彼の家の[illegible]まるやうにどしんと起つて、私達の踏んでゐる大地が、ぐらぐらつと家の骨でのやうに揺れた。

それは鶴吉の若夫婦が、出て来るのと殆んど同時に、髪を乱れて後ろに、瓦の落ちる音と思つて揺れは揺れながらに、近所の母屋の、文化住宅がいつせに洋折衷の二階が、其の一と揺れを食ひとめる間もなく、

はらくと赤い動乱する色を帯びて。初めは、どうなつてゐるのか、多分人多かまさか倒れることはなかつたのだ、つかなかつたが、それは高い屋根の朱い西洋瓦を乗せてまゝ、高い二階の屋根が山脈の様に連なつてゐるのだつて。が、何だか一瞬間、嘘のやうな気が――て。其強震は暫らく続いて。そして其二階屋に連接して、母屋の裏の日本建の古い平家の、柱や戸や襖をはらくと紙屋根を其中へ落ち込ませて。私は目のあたりに此の二つの家の、倒壊するのを見てゐる。

て。が、西方倒れるのを見てゐながら、何だか児戯に類する やうな気がして、本気に倒れてゐるのだとは思はなかつた。振動が少し静まつて、それと沈静に散乱した時、こんなぐつたりかと思つて、其中に在つて、私は自分の住んでゐる家を見返つて。と、其背の低い、黒塗の瓦鉛屋根を乗せて離屋は、鴨居のあたりを継目にして、がタく揺れながら、まぢうまく釣合を保つて、倒左右にふらつもなかつて。

「貴方のお家は不思議に倒れませんな。」

勘兵の義主人い、まぢ收まらぬ激しい震動

の中で、私を顧みて言つた。

「不思議に大丈夫ですね。」

私たちはそんな事を言ひ交すうちの金箱は

あつたか、奥の家にあるわ供たちは、続いて

次々に起る振動に、「怖いよう、怖いよう！」

と叫んで、特と穀に、お母ちやん。縋りついてゐ

た。其母穀も母おろく声でつた。

「大丈夫。もう餘震です。が、どうから怖いの

は津浪です。」

私い又、前年の新学期で、かう言ひながら

倒れて庭の松の根元を、第連の智恵で地面

に敷き、子供たちに地割れかしても落ちまぬ

と言ひ安いを与へると、やゝ静まつて屋内へ

再び取つて返した。そして、戸棚の

中の衣類を入れて行李、鞄を、急いで引張り出すと、庭ま

で持つて来て、浴衣と着換へた。心おでは、

なるべく良い其の中で丈夫な単衣を、着ーくない衣

物を着て逃げたいのと、津浪が来て死んだ時

の、一緒の死装束の積りだつた。

「大海嘯は、激震から十五分乃至二十分位の

間に来る。三陸の大海嘯の時も、二十分位後

に、沖から壁のやうなものが、ずーつと押し寄せて来て切り立てさうだ。」

私い記憶に少しの間はあるか知らぬが、そんな事を矢張り家内で知ってゐる。私は先づ耳に手を当てゝ、海嘯りを待いてゐた。

それは地震前と、ぐーて変りがあるとは思はれなかつた。然るに大きな地震である以上、少しの海嘯が必ず来ない訳はないと思つた。

然し、まだ地震も、家も気になつた。

其中に松風閣の外から

知から集つて来たのか、二三人の若い男達が、倒れた毒瓦の屋根の所へ、何か叫びながら街路の方へから寄つて、敵に被さつた屋根の下を歩き廻みながら、羽目のあたりを赤いめくつてゐた。

屋根瓦と

「どうしたんです。」私も馳せ寄つた。其の人「此処に人が入つてゐるんです。」と、男は云つて、「あい。大丈夫か。今直ぐ出してやるぞ。大丈夫か。」と、中に向つて呼んだ。

「大丈夫です。」思ひの外に叫喚染みない、弱

らしい声がして、何とか何とか材木か、暗く
縦横に交叉してゐる中から、店のやうなもの
の、目に狭くて、洗ハないらしい女の声がし
て、そして白いものが其中で動いてゐるのが
見えて。其女中の浴衣らしい、
「大丈夫ですかね」私は再び男に尋ねて。
「ハイ、直ぐ出ます。女中が、店の方にお客さま
が、一人入ってゐるやうですが、もう済ずん
てゐるかも知れません。」
私は是い思ってさすり、憐憫が激しいなと思
って。

洗ってゐる人も人で、そんなものよりも、生き残って人も何も一緒にして、おって行くに違いない、あの大海嘯が怖ろしかって。そ水は少くとも十五分過ぎ必ず来る筈ひない。……

出て、都って危険は陸地なる安全もあって
が、それにも増して、十分後に来ると
思ふ海嘯が恐ろしくて、胸も足もわくわくして
来て。
私は思ひ切って、単身様子を見に
長谷観音の山へ、上って見るにしくはないと
思って。
すると思ひも寄らぬ財布ざけを手につけて、
家の物は凡て放り出し、
傍、直ぐ前の長谷観音
堂へと立り出て。
「志田さん。後恐いのは海津波ですよ。だから
家の物なんぞどうでもいいから、年廻りの物

ぐりおつて、長谷観音の方へおいでなさい。
僕は先に行つて様子を見て、危険がつくら直
ぐ知らせますから。」

生垣の多い径は、蜜ろう気味悪い位静寂ざ
つて。地震のあと、雪は吹き拂はれて、日は
燦然と甚処らの松の百から、径の上へ落ちて
ゐて。それが却つて私達には気味悪かつて。私
はいかりして歓喜の涙みへ行く途中に、もう海
嘯に襲はれて、後ひきられはしまいかと危惧
しながら、一散にその人一人通らぬ径を、歓

喜の境内へ急いだ。そして直ぐ、区役所にて
殆んど一二町もないので、甚処へ辿りつくこと
が出来て。

（駄目）

私は急いで石の階段を上つて。と、甚中途
の、九折して石段が、一旦左折するとてろに
厄徐如来堂が在つて、それが滅茶々々に倒れ
てゐるのを発見して。迷信とそれ訳ではない
が、私はこの鎌倉で一夏を過すべく、今の家
へ来て翌朝、散歩かてら長谷へ参詣に来て時、
此の厄徐如来に祈願を籠めて。それは、私が

（甚だも所詮前にみし）

水に拙いので、万一の時に災厄に会はないよう、と、祈りながらのぞいてゐるのだが、其伊堂を見る時、私い私の家まで安全だつて事を思つて、月並なから此の厄徐堂が、自ら流れて来るの厄を代つて受けてくれやうに感じて。私は再び手を合せて、其滅茶苦茶に壊れ切つて堂に礼拝する気なる程なかつて。

それから、直ぐ上を仰ぎ見ると、欽吉堂はたい方桧が、傾いまつてゐる茅の立つてゐる。私は一緒の嬉せて、まぐ立つてゐる。

さを覚へて、側の茶店めいたる小屋が、死んと倒れ寄いでゐるやうな石段を、急いで駆け上つて。堂の前には一尺近い亀裂が、石磴に近く割れてゐて、堂宇の廣場を、山崩れ見ひてゐるが、そん直ぐ山崖になつてゐる事は何でもなかつて。私が欽吉に礼拝する。

堂の横の廣場にもう一度厄が来てさう、一とくまりもは、もう、それでもあるまいと思はれる堂の前で、再び長くもこの十人近くの避難民が、勿論肩のみ肩のまいて、集つてゐて。

皆には、負傷者もあつて。

かと思ふと、地震の矣張中の、此処へ来る東京からの人と見えて、一人の蒼色のハイカラな洋服を着た青年が、蒼白い顔を持ち、まゝ、如何に不調和に其の見えること。

何処かのかみさんは、左眼を潰されたと見えて、閉ぢたまゝ、血の脈筋を顔に表した、が、蒼色の眼蓋を、捻かゝとせず、海の方を眺めてゐる。彼女は痛みも何も忘れ、生命だけ助かつた事を喜のみ知つて、縫いて至る地震と津波とにおそれて、毎日れてゐる。境内の樹の蔭は、足を挫かれた老婆が、ゐる。一本さい梅人の漢師めいた四十男が、繃帯に縋一つで、額に大きな瘤を拵へながら、何か喚いてゐる。地揺れは一二分置きに、ぐ

らくする位なつて来た。今にも、裏山や此の境内や、敏音堂まで崩れ落ちさうな気がする事もあつた。が、それにも慣れて、私は大海嘯が気になつた。

私は崖の端に進んで、松の間から、鎌倉湾一帯境内を限る眺めた。すると、どうだ！湾内の海水は、いつも漫ーしてゐる岸から、二三町も沖の方まで、すつかり干上つてゐるではないか！それはずつと材木座の方まで、さゞ所う潜水を殘ーして干潟となつて、

海藻か岩かは知らぬが、所々黒く点々と殘して、落気味悪く空を反映してゐる。……そして其先に、(と目久くところを張り伸べば、)殆んど小坪と稲村ヶ崎とを連結する線まぢかに、白く砕ける波頭をおつて海水が、黒ひの外平線に寄せ返してゐる。其の先の洋面は、一種のシケ色を帶び、そして更に煙ってゐるが、いつもと同じやうに茫漠として、今は、波の音さへ遠く高くはなし。……

私は思はず其の洋の、黒く、又まだ、辯ずり返つて声のない、(帶の)脅威に、声を呑んで目を瞬つて。ほんとうに

(あの手紙がもう一度寄せて来て)

其瞬間、とんな大きな海嘯が、鎌倉(帶)を襲ふであらう。と思つた。そして、どうなるだらう。

まさか此の海嘯の来る事いなかうが、下にまだ男四人、二人ある人々は、どうなるであらう。

私は周囲を見廻して。傍に、目をしばたたせて浪師が、矢張り一人沖を眺めてゐる。

沖はどうです。沖に、陸のやうなものは見えやしませんか。三陸の大津波の時は、沖からひり立てて陸のやうなものが、ずーつと押

して来てくれるぞ。そんな梅よはありませんか。」私は自分を慰めるように言った。

「いや。沖は何ともねえ。ませて笑いそ。そんなものは見ねねよ。

ぞが、あんぞけ干てるんぞから、大ひつけねえ奴は来るに違いねえぞよ。」

「奥に角、もう少しの百、よく見て呉れませんか。」

其処へ、鎮魂で知合になった宮島とえみ吉年が、洋服なんぞ着てやって来た。

「どうです、連隊は。」

「見給へ。あんなに干てみるんぞから、きっと来るに違ひない。――一つ、観音梅の鐘をついて、皆に知らせようぢやないか。」

私は実際に思ひついて、さう言った。

「成程、大変な引きようぢやさうですね。――ぢやさうしませう。」

二人は観音堂に行って、中を伺ひて見る堂々らしい人に、鐘を撞いてもいいかと尋ねた。

「鐘？」

すると其人は分からぬって。「鐘撞堂な

んかもう崩れて了ひましさよ。」

鐘は断続―ちれぬなりなかつた。

私はもう手を拱いて、其気味の悪い干涯と、

左方の鎌倉の、前方、方至り淡み殺つて屋根を眺めて、海嘯の襲来を待つ外なかつた。見渡すと凡て傾きかゝつて家は、傾けなく根の底のるのを待つかのやうに、

る。海岸に面した大きな家の屋根に、人影見えない。人が一人二人登つて、黒く沖を眺望してゐるのが見える。

其頃から大町の中央あたりに、まざまざ濃くない煙が騰りはじめてゐる。

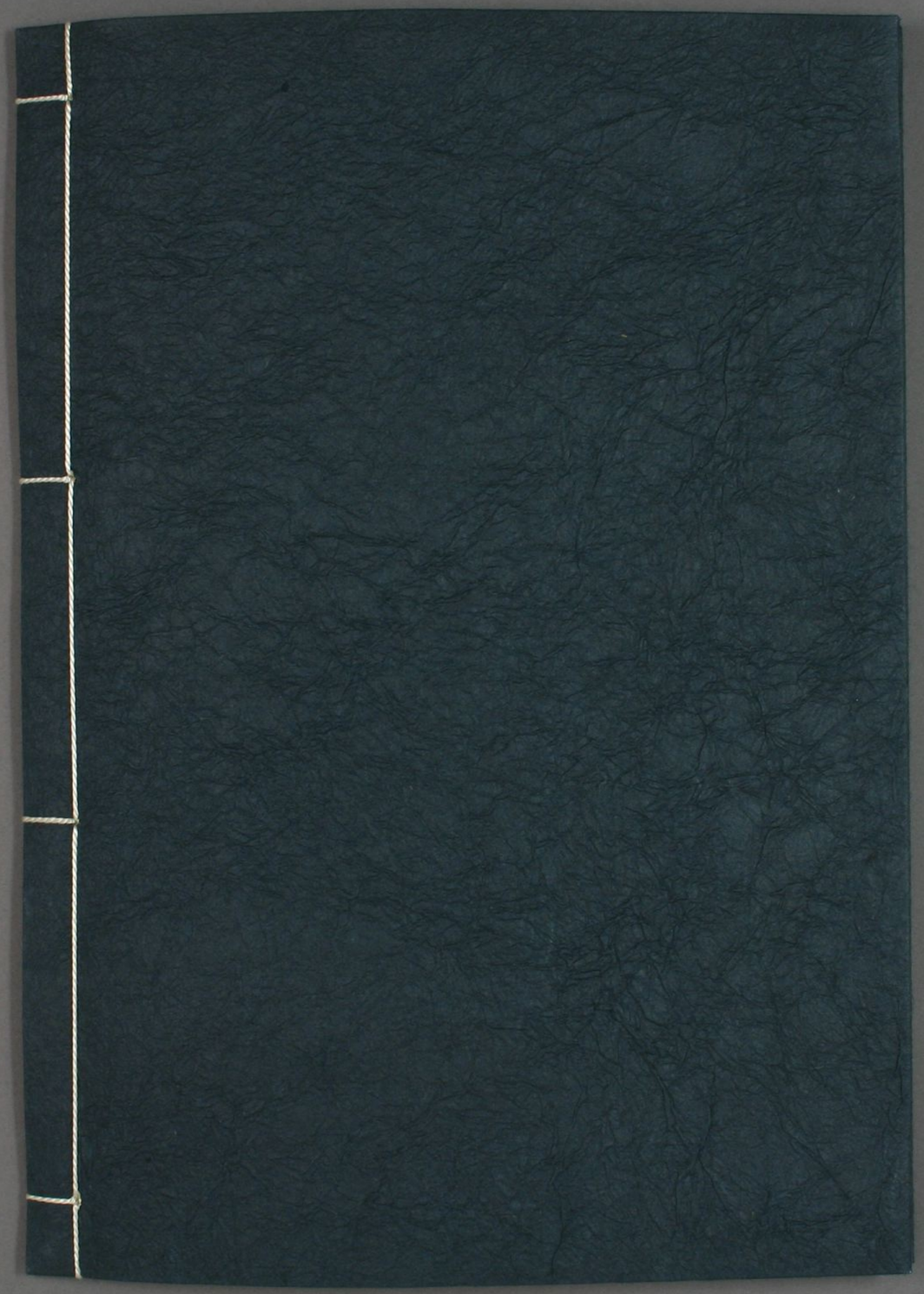
僅かの間ざつと、鎌倉全部の海水はさらはれて、

僅かの間、私はいろ〳〵な事を考へた。かう―〳〵此処は避難してゐる三四十人のみか、―つまり自分一人のみか、生きるものも、一人残らず生きてはゐられまいと云ふ事。

殺つてしまうとでもいやうな事。

友人の事。さては此東京の母の事。

の鎌倉で、恐らく此の干涯を知らずにゐて、やがて波に攫はれるであらうとでもいふ、田中の事。四子の事。……就中、彼女の事が何より

も強く、私の胸に来るる。かうそみ実際があつて、誰も彼も皆死ぬべき運命に在つてゝれはそ、天は私にあゝそみ最後の幸福を、しかも此の一両日前に、昨日私に与へ給ふそのぞ。私の半生の苦を償みて、そして死に就かせるそめに。私は全く其の瞑目、安んじて皆と共に死ぬのなら、死んでも悔はないと、実に満足へそ。田舎に事更に無し。実さそ。

そ。併しそそは云ふものゝ、死めとはまぞ信じ難く。